

『弁内侍日記』・『中務内侍日記』の表現とその問題点

増 井 典 夫

一、『弁内侍日記』の表現とその問題点

1

中世女流日記は、中古の作品と比較すると一段価値の低いものと、従来、認識されてきた。中でも『弁内侍日記』は、『中務内侍日記』と並んで評価の低いものであった。確かに文芸性という点からみれば、この作品を高く評価することは難しいように思われるが、近年、今関敏子氏による評価の見直し⁽¹⁾もなされている。ここでは、この作品の表現面で気付いた、いくつかの点について述べてみたい。

2

『弁内侍日記』の研究は、池田亀鑑氏の、「微笑の文学」との記述⁽²⁾から始まった。大内摩耶子氏⁽³⁾、今関敏子は、この作品が「おもしろし」「をかし」といった、明るく肯定的な感情を示す形容詞を多用していることを述べ、今関氏は、このことが「作者の性格の反映であり、作

品を明るくしている」としている⁽⁴⁾。

作品の素材は、確かに明るいものが多い。例えば、第二段は「御深草帝の即位」に関するものであるが、

三月十一日、官庁にて御即位。はるの日もことにうら、かなりしに、さまざまのざしきども、いはんかたなくめでたし。

(以下、引用は今関敏子編『校注 弁内侍日記』による)

のように記述されている。確かにめでたい出来事である。しかし天候は、記録によると、大雨があり、大風が吹き、とても「うららかな」ものではなかったと小林智昭氏は指摘している⁽⁵⁾。

そこで小林氏は、弁内侍が天候がどうかもわからないほど「あまりにもおさなく無心で」あったから、作品も明るく無邪気なものになったと見ている訳である。

しかし、松本寧至氏の指摘⁽⁶⁾にあるように、「弁内侍はめでたいこと

表1 主に形容語を修飾する程度副詞の用例数

	いと	いといと	いとど	げに	ことに	まことに
弁内侍	95	6	3	7	51	11
中務内侍(8)	14	0	2	14	13	3
かげろふ(9)	436	0	19	18	10	2
和泉式部(10)	67	0	2	7	3	3
紫式部(11)	148	0	7	6	17	5
更級(12)	95	0	4	7	2	3
讃岐典侍(13)	31	0	9	9	3	10
たまきはる(14)	4	0	5	0	6	15
うたたね(15)	37	0	7	2	0	1
十六夜(16)	44	0	7	0	3	1
竹むきが記(17)	101	0	6	0	6	9

を書くのが仕事であった」訳であるから、「天候がわからないほどおさない」人間であったとは一概に言えないであろう。むしろ「めでたさ」のために悪天候には目をつぶったと見るのが妥当な所ではないか。(池田亀鑑氏の説以降、「弁内侍は日記執筆時に少女だった」と見る向きが一部にあるようだが、森田兼吉氏は、この作品には「弁内侍の三十代の人生が描かれている」と指摘している⁽⁷⁾。)

このように弁内侍は、「宮廷讚美を目的として、作品の印象を明るくものにするために意図的に記述を行ったと考えられる訳であるが、ここで用語という観点で、もう一度そのことについて考えてみる。形容詞については先学が述べられている通りであるが、もう一つ、「主に形容語を修飾する程度副詞の使い方」という点から考えてみたい。

表1に中世・中古の他の女流日記との比較で示したが、「弁内侍日記」でまず目立つのは、「ことに」の多用である。

①五月の廿日あまり、有明の月くまなくて、ことにおもしろく侍しに、(七段)

分量的には小品といえる、この作品での使用例の多さはかなり目立つものである。この語については後でもう一度触れることにして、もう一つ「中務内侍日記」と比較して目立つのは「いと」の使用数である。ただ、「いと」は「ことに」と違って、他の作品でも使用例は多い。そこで、試みに「かげろふ日記」の上の部での「いと」の用い方と「弁内侍日記」でのそれとを比較してみる。

「かげろふ日記」の上では「いと」は86例、「弁内侍日記」では、「いといと」6例を含めると101例「いと」は用いられているが、「いと」の被修飾語を見ると次のようになっている。(2例以下省略)

かげろふ	上	弁内侍
あはれなり	1	3
かなし	6	7
おほつかなし	4	18
をかし	4	6
あはれなり	4	19
めでたし	4	5
やさし	3	4
びんなし	3	20

「かげろふ日記」で「いとあはれなり」という表現が比較的多いのに対して、『弁内侍日記』での「いとおもしろし」という表現の多用が特に目立つ。このほか、明るく肯定的な気分を示す表現が多いのが『弁内侍日記』の特徴であることが、この表からもわかる。このような表現の多用で、「明るさ」「無邪気さ」といったものが印象づけられている訳である。「無邪気さ」は、作者が意図的に印象付けようとしたものとは言えないかもしれないが、弁内侍はめでたいことを書くのが仕事だったという点からすると、少なくとも「明るさ」は、作者が宮廷讚美のために意図的に印象付けしようとしたものであり、その意図は成功していると見てもいいのではないかと。

また、同じ形の表現の多用を「おさなさ」と決めつける訳には行かないであろう。「めでたさを強調するためにあえて同じ形を繰り返して用いた」とも考えられるからである。

しかし、次のように、

廿日はりんじの御むま御らん也。さきくは、たゞめぶがひきわたしたるばかりにてありしに、御隨身かねみねにあげさせて御らんせし、いとをもしろし。公卿は万里こうちの大納言ぞ候給し。けづけ中将すゑざね。庭の月かげいとをもしろくて、(八十六段)

と、同じ段で続けて用いられているのは、表現上、「無神経」だと批判を受けてもやむを得ないであろう。「めでたさ」を印象付けるためではあっても、少し「表現力が未熟だ」と言われても仕方のない文章

ではないだろうか。この点、「無邪気さ」という印象を与える一要因になったかもしれないと思われる。

もう一つ、「ことに」の多用という問題がある。

「ことに」は全部で51例みえるが、「ことにおもしろし」の例は8例(七十段の「ことにおもしろし」の例を含めても9例)であり、「いとおもしろし」のように反復使用されているわけではない。

しかし、「ことにおもしろし」も次のように、

はなざかりことにおもしろかりしに、ためうちの中將奉行にて、御まりあり。花山あんの大納言、冷泉大納言、万里こうちの大納言、左衛門督、右衛門督、すけひら、きんたゞ、ためうち、ためり、たか行。ひくれか、る程、ことにおもしろく侍しかば、(八十七段)

同じ段で続けて用いられているのを見ると、「幼稚だ」「下手だ」というような印象を持つ人も多いのではないだろうか。(このほか百二十五段でも「ことにおもしろし」が続けて用いられているところがある)。以上のような用語・表現も作品を「幼稚」だと感じさせる一要因になっているのではないだろうか。

3

『弁内侍日記』が明るく好ましい作品であることは、誰もが認める所であろう。また、弁内侍が宮廷讚美のために、作品を明るい印象の

ものにしてしようと意図的に記述を行ったことも、特質として認めるべき点であろう。

また、本稿では触れなかったが、中世の美意識を感じさせる「荒涼さへの注目」という点も、一方では「弁内侍日記」の特徴として挙げられ、特質として数えるべき点であろう。

このように、評価すべき点はいろいろあるにもかかわらず、「無邪気」で「おさない」作品とのみ見られ、あまり顧みられることのなかったのは、同じ箇所と同じ表現を繰り返すという、表現上の配慮のなさが災いしたのではなかったか。少なくとも、低評価につながる一要因にはなつたと思われる所である。

二、「中務内侍日記」の表現の問題点

1

【中務内侍日記】については、近年、岩佐美代子氏による本文の制定や新しい解釈、寺島恒世氏による新しい視点からの読み等が示され、再評価がなされようとしているようである。

ここでは、従前の低評価を招いた一要因としての、この作品における表現の問題点について確認をしておきたい。

2

【中務内侍日記】の表現の問題点については、既に大内摩耶子氏によって指摘されているが、氏の考察は、従来用いられてきた扶桑拾葉集本によるものである。では、岩佐氏の主張する彰考館本で見ると、

大内氏の考察は有効性を失うのであろうか。以下、大内氏が指摘された点などを中心に、「表現のまずさ」について彰考館本で確認していきたい。

まず、二十一段であるが、大内氏によって「あはれ」が繰り返して用いられていることが指摘されている段である。

同じき十三日、播磨の中將、日ごろのわづらひ重くなりて、今はたのみなくなんとときく。あはれに悲しきを、思ひながら今まではぬおこたりもうたてくて、

いかにしてしばしこの世に影とめん

わかれんことの悲しくもあるかな

かぎりなくあはれとのみはなげけども

いはねば人のしらずぞあるらん

「あるかなきかのやうにて、うき身、世にかげとどむべきこちせぬ心ぼそさは、ただ思ひやれ」

といへば、

いさやげにあはれ悲しと思ひける

心のほども今こそはしれ

ことわりもげにと悲しくあはれなり。こよひは十三夜ぞかし。御会あれどもまじらねば、あはれに、いつしか、この世ながらあましかばの悲しさも、やうやう人々あはれがる。

(以下、引用は小久保崇明編『水府明德会彰考館蔵本 中務内侍日記——本文篇——』による)

大内氏は、

この場合「あはれなり」を用いる必然性は確かにあり得るので、尤な事と理解は出来るのであるが、こう同語をくり返し用いるという愚策より他に表現の方法を持合わせていなかったのであろうか。他に適当な語はいくらでもある筈と思われる。用語を何回もくりかえし用いるという無神経、用語に対する配慮のなさ、感覚の**ぶさが**思われる。

としているが、事情は彰考館本文によっても変わらないであろう。しかも「あはれ」だけでなく「かなし」も反復使用されているのである。

また、三十四段では、

(略) 男には左中将ためかぬばかりなり。警護のすがたにて参りたるいとやさしくみゆ。権大納言のすけ殿、新宰相殿、女房三人、男三人、数にもれぬ身、われながら嬉しうこそおぼゆれ。還御はほのぼのとあくるほどになりぬれば、雪うちはらふ警護のすがたども、やさしくおもしろく見えたり。

と「やさしくみゆ」という表現が反復使用されている。さらに、七十一段でも、

(略) 物のねすみのほりて玄上の御ばちおとことにひびきのほりて、和琴のしらべ、本末の拍子に合せてかきなす、おもしろくやさしきに、ふるめかしなど申すもおろかなり。やそぢにあまりたるさねきよの二位の声の色むかしゆかしくおぼゆ。時々きえかへりて、年のしるしと、かすかなるをりにも、玄上の御ばちおとにまぎれて、おもしろくやさしく聞ゆ。やうやう御神楽もはつれば空もあけぬ。神祇官もことに近ければ納受し給ふらんとおぼえて心のうちに、

君が世をちよのはじめといのるかな

神のつかさのちかきたよりに

御神楽はてぬれば人々禄たまはりていでぬ。小忌のすがた、あくる日影にかかやきてやさしく見ゆ。

と「やさし」が反復使用されている。大内氏は、

同じ部所に同じ形容詞を繰返し用いる愚をくりかえしている。適当な用語が外にあり得ようと無神経さのほどが歎かれるし、持前の語彙の貧弱さが嘆ぜられる。

と述べ、さらに、

極言すれば達意の文章すら書けていない所があるのである。さし

たる文才もなく、根本的には緻密な思考力に恵まれていなかったという事になるのであろう。

と断じているが、やはり彰考館本文によっても事情は変わらないであらう。

同じ箇所と同じ表現を重ねるといふ、文章の下手さは、『弁内侍日記』の場合と同様、この作品の低評価につながる一要因になったと思われる。

3

岩佐美代子氏は、『中務内侍日記』が『源氏物語』『狭衣物語』等の強い影響下にあることを指摘しているが、先行作品の影響を受けたことが直ちに作品の高評価につながる訳ではない。あくまでも作品それ自体の出来で評価を計るべきだと考えるが、『中務内侍日記』の出来には疑問符を打たざるを得ないように思われる。

一方、寺島恒世氏は、この作品が「基調に哀愁を漂わせる」のは「叙景のための一手段」であり、「風景描写は、京極派和歌の出発に立ち会った作者がその歌風の生成過程を書き留めようとする意図に発している」とされる。⁽²⁶⁾

このような点に『中務内侍日記』の特質を認めることができようが、相当に作品を読み込まねば、こういった特質には気づかないのではあるまいか。

これに対して、同じ用語を何度も繰り返すという「表現の下手さ」

には一見して気がつく訳で、もう少し表現に対して配慮が有ったら、評価もまた違ったものになっただろうと惜しまれる所である。

三、まとめ

本稿の考察をまとめると、次のようになる。

○『弁内侍日記』『中務内侍日記』共にすぐれた点はあるのだが、表現に対する配慮のなさ、文章力の乏しさが最初に目につき、作品の特質を見えにくくしている。

以上のようなになる。

注

- (1) 今関敏子氏「弁内侍日記」(『中世女流日記文学論考』昭和六十二年三月刊、和泉書院)がその代表と言えよう。
- (2) 『宮廷女流日記文学』(昭和二年、至文堂)
- (3) 「弁内侍日記考」(『大阪府立大学紀要』12、昭和三十九年三月)
- (4) (1)に同じ。
- (5) 「弁内侍日記ノート——法語とのかかわり——」(『専修国文』15、昭和四十九年一月)。以下引用する氏の論はこれによる。
- (6) 「弁内侍日記と中務内侍日記」(『中世女流日記文学の研究』昭和五十八年二月、明治書院)。このほか今関氏の(1)の論文に「宮廷讚美」への言及がある。
- (7) 「弁内侍日記」論 二——弁内侍と少将内侍——(『梅光女学院大
学 日本文学研究』26、平成二年十一月)

- (8) 【彰考館本「中務内侍日記」総索引】(小久保崇明他編)による。
- (9) 【改訂新版 かげろふ日記総索引】(佐伯梅友他編)による。
- (10) 【和泉式部日記総索引】(東節夫他編)による。
- (11) 【紫式部日記用語索引】(東京教育大学中古文文学研究部会編)による。
- (12) 【更級日記総索引】(東節夫他編)による。
- (13) 【校本 讃岐典侍日記】(今小路覚瑞他編)による。
- (14) 【たまきはる(健御前の記) 総索引】(鈴木一彦他編)による。
- (15) 【うたたね 本文及び索引】(次田香澄他編)による。
- (16) 【十六夜日記 本文及び総索引】(江口正弘編)による。
- (17) 【竹むきが記総索引】(渡辺静子他編)による。
- (18) 他に1例、虫くいで「いとおもし」 となつている所がある。
- (19) 「いといとをかし」1例含む。
- (20) 「いといとめでたし」2例を含む。
- (21) (1)に同じ。
- (22) 【「中務内侍日記」読解考】(国語国文) 50-11、昭和五十六年十一月、【彰考館蔵中務内侍日記】(昭和五十七年二月、和泉書院)その他。
- (23) 【「中務内侍日記」の風景——書くことの意味をめぐって——】(日本文学) 平成三年七月号
- (24) 【「中務内侍日記考」】(大阪府立大学紀要) 11、昭和三十八年三月
以下引用する氏の論はこれによる。
- (25) 【「中務内侍日記と狭衣物語」】(国文鶴見) 18、昭和五十八年十二月
その他。
- (26) (23)に同じ。